

触が電流のように手に伝わった。びくっとして、思わず手をはなした。まわりを見ると、みんな手をのぼしている。なかには、引き金をさわっている者もいた。

「まだ、引き金をいじってはいけない。うっかりすると、こうなる」

男は、腰のベルトからピストルをひきぬいた。銃口を天井に向けて、むぞうさに引き金をひいた。パンとかわいた音とともに銃口からうっすらとけむりが立ちのぼった。みんないっせいに天井に目をやった。蛍光灯のわきの白いボードに、南天の実くらしいの小さな赤い点がついていた。

「ペンキだよ。ピストルは本物じゃない」

なあんだというような笑い声がいくつかあがった。

「だからゲームだといったらう！」

男は目をつりあげてみんなをにらんだが、すぐに顔色をやわらげた。

「これからきみたちは、フィールドに出て戦う。武器は机の上のピストルだ。自分以外はすべて敵。撃たれた者はつきからこのゲームに参加できない。これは、サバイバルゲームなんだ。最後に残った者にはすばらしい特典がある。それを楽しみに、遠慮なく撃ちあいたまえ。さあ、レッツ・ゴー！」

男がばんばんと手をたたいた。

そのとたん、場面が変わった。

森の中だった。重なりあった木々のあいだをふみならされた細い道が通っている。しんとしている。鳥の声も風の音も聞こえない。ピストルをかまえ、用心ぶかくあたりを見まわしながら歩きはじめた。

いくらも行かないうちに、右手の方でパンというかわいた音がした。とっさに道にたおれこんだ。

「ちえっ」

舌打ちとともに、がさがさと茂みをかきわけて逃げていく音がした。すぐさま半身を起こして、ピストルをかまえたが、茂みはもう静まりかえっていた。

起き上がって左手を見た。道ぼたの木の幹に、赤い丸い点があざとつきりつきりついていた。ちょうど頭の高さだ。あぶないところだった。たおれこむのが一瞬でも遅ければ、頭に当たっていただろう。

まともに道を歩いていたら、かっこうの標的になることに気がついて、左手の茂みにふみこんだ。なるべく音をたてないようにしながら、慎重に茂みをかきわけていった。しばらく進むと、木々のあいだに建物の屋根が見えてきた。さらに進み、全体がみわたせるような場所に移動した。道具置き場のような小屋だった。せまい空き地に建っていて、半分こわれかかっている。

あの小屋にひそんで、だれかが近づいてくるのを待ち、ねらい撃ちしたらどうだろう。そんな考えがうかんだが、